

## 目的

本委員会の目的は、デジタル社会の「読み・書き・そろばん」である数理・データサイエンス・AI 教育を全学的に普及させ、1 名でも多くの学生に修得させるとともに、意欲ある学生に対して自らの専門分野への応用力および実践力を修得させることにある。

## 構成メンバー

橋爪 善光 准教授  
秋吉 浩志 准教授  
荒平 高章 講師  
ディンダ プラマンタ 助教  
幸野 憲道 教務課主査

## 取り組み内容

今年度は全6回会議を実施した。前期期間中は主に文科省からリテラシーレベルの認定後ロゴの活用法について議論をした。また、前期終了時における修了者の認定および修了証の授与式の開催について議論を行った。修了証の授与は単に該当者に授与するだけでなく、いかに他の学生に情報を発信しより多くの学生の修得意欲を高めるかを念頭に置いて議論を行った。後期期間中には、さらなるデータサイエンス教育の周知方法について議論した。また、前期オリエンテーションにおいてはプログラム紹介の時間を取り、後期オリエンテーションでは後期に履修可能な科目をピックアップして履修を促す動画を作成して学生への周知をはかった。そして、数理・データサイエンス教育コンソーシアムのワークショップに参加し、本学におけるデータサイエンス教育の取り組みについて紹介した。

本教育プログラムの認知度向上を目指した取り組みとして、オリエンテーションにおける教育プログラムの案内や学内掲示や SNS を利用した広報を行った。ただし、後期オリエンテーション時に広報も兼ねて全学生の前で実施する予定であった修了証の授与は新型コロナの影響でオリエンテーションが遠隔方式となった為、別途授与式を行うこととした。そしてその様子を大学ホームページや SNS で情報発信を行った。

令和3年度の修了者は前期リテラシーレベル7名、後期リテラシーレベル1名、応用基礎レベルは0名であった。リテラシーレベルに関して前期は情報ネットワーク学科の2年生を1名と3年生の留学生を含み、後期は経営情報学科の2年生が修了者であった。

## 自己評価

1名と少ないながらも日本人学生だけでなく留学生や経営情報学科の学生からも修了者がでたのはオリエンテーション等での広報が寄与したものと判断している。

### 改善・向上方策（将来計画）

今後はリテラシーレベルに関しては全学生が修了することを目標に、プログラムの認知度をあげるとともに履修者を増やす為の取り組みが必要だと考えている。来年度は、実際に履修に促すための取り組みを実施する。その為の取り組みとしてリテラシーレベルを修了した新4年生で修了証を就職活動に活かした実例を調査し、教育プログラムの紹介内容に組み込んでいく。また、令和4年度には応用基礎レベルの認定制度が始まる為、本教育プログラムの応用基礎レベルを申請し、より多くの学生にとって魅力ある教育プログラムにしたい。